

「真の牧者に養われて」
エゼキエル 34:11-16

【1】宗教改革記念日

10月31日は「宗教改革記念日」である。マルチン・ルターがヴィッテンベルクの城教会に95箇条の提題を掲げたことを記念している。このとき一気に宗教改革が行われたわけではないが、聖書の真理が曲げられ、信仰者たちが食べ物にされていた当時の教会に対する改革の火種となった。このこともまた、神の御業であると理解することができる。神はご自分の教会をお建てくださり、教会の頭、主として世話をしてくださるからである。宗教改革記念日は、「わたしがわたしの羊を飼う」というエゼキエル書のメッセージの証しでもある。

【2】エゼキエル書について

エゼキエルは、南ユダ王国で紀元前6世紀に活動した預言者である（ヒゼキヤよりも100年ほど後の時代）。この時代世界はアッシリアからバビロニアへ力が移行していた。ユダ王国はヒゼキヤ以後、ヨシヤ王によって宗教改革が行われたがヨシヤの死後再び民は神に背き、滅びの道を歩んでいった。最終的にユダ王国はバビロニアによって滅ぼされ、民は奴隷として連行された。エゼキエルも捕囚の民の一人であったが、捕囚から5年後に神のことばを受け、イスラエルの裁きの原因と神の救いを語ったのである。エゼキエル書は、前半が神のさばきのメッセージであり、34章から救いのメッセージが述べられている。

34章には主の羊を食べ物にする牧者たちの姿が記されている。この牧者とは、民の指導者たちのことである。

神の選びの民に指導者は、本来神のみこころを実行するために立てられた者たちであった。それにもかかわらず、彼らが行ったことは羊たちを散らすことであった。また、羊たちも貪欲で羊飼い同様に罪深いものであった。神は、このことを憂い、裁かれる。羊たちを散らすこともまた、神の御業であった。ところが神はこの羊たちをもう一度見出し、ご自身の御手で養うと約束されたのである。

【3】散らし、集める

エゼキエル書の中には「散らす」ということばが神の裁きの現れとして表されている。神は、ご自身の主権を持って民を散らすお方である。民を散らす忌むべき牧者たちはうなじの強い民が自ら負わなければならない咎でもあった。しかし、だからといって散らす牧者たちが認められているわけではない。神は、「牧者たちを敵として、彼らの手から羊を取り返す」(34:10)と決意し、救いのみことばをくださった。散らされた者を集めるということは、神の回復のわざである。神は、そのために真の牧者を起こされたのである(23)。その方こそ、メシヤ、キリストである。

主イエスは民を集めるためにこの世に来られたのである(マタイ 24:31、マルコ 13:27、ヨハネ 11:52、他)。実にイエスの十字架の死は民を集めるためであった(エペソ 1:10)。キリストにあってすべてのものが一人の頭の元に集められるのである。

私たちはこの神の福音（キリストのみわざとみことば）によって集められたのである。養うものもなく、頑なで、貪欲で、傷つき、病んでいた者を神は再びご自身のものとして取り戻してくださいましたのである。